

2026（令和8）年度

編入学試験

文学部

文化史学科

小 論 文

10時00分～11時30分

受験についての注意

試験開始の前に、以下の注意をよく読んでおくこと。

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開かないこと。
2. この冊子の問題本文は**3**ページである。試験開始後、問題を確認し、落丁・乱丁の箇所があるときは手をあげて交換を求めること。
3. 解答用紙はすべて**HBの黒鉛筆**または**シャープペンシル**で記入すること。
4. 試験開始の前に、解答用紙の定められた位置に氏名と受験番号を記入すること。
5. 解答は解答用紙の指定された場所に記入すること。余白、裏面には何も書いてはならない。別に下書き用の用紙を配布するが、使用については自由である。
6. 筆記用具、受験票以外のものは、かばん等に入れ、机の下に置くこと。
7. 試験時間中に無断で退場することはできない。
8. 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、解答用紙は表を上にして置くこと。この冊子（試験問題）および下書き用紙は持ち帰ってよい。

課題文を読んで、次の設問に対するあなたの考えを六〇〇字以上八〇〇字以内でまとめなさい。〔100点〕

【設問】

「右の頬を打つ者には、もう一つの頬を向けてやれ」という聖書中の言葉の解釈において筆者（米田彰男）と吉本隆明とがどのように異なるかを説明しなさい。また、この言葉をあなた自身はどのように解釈するかを述べなさい。

【課題文】

それではどうしろとイエスは言っているのか。それこそ次の言葉であり、この場面においてこそ弱き者への共感から来る、イエスの反抗的笑いが微かに聞こえて来る。イエスには、こりと、笑い、殴りつけられた弱者に向かつて言う、「あなたの右の頬を打つ横着な権力者どもに、左の頬を向けてやりなさい」と。マタイのこの言葉は、キリスト教徒もそうでない人も、多くの人が通常解釈するような、忍従の精神をイエスが奨励しているのではない。今、我慢すればやがて天国では報われるから、ここはしばし耐え忍んで、左の頬も殴らせてやりなさい、と言っているのではない。パウロは一コリント七の二一〜二四などで、そのようなニュアンスの言葉を述べているが、イエスは決してそんな生つちよろいことを口にするお方ではない。従って、『マチウ書試論』で吉本隆明が語る次の言葉も、イエスの真意を読み取ってはおらず、的を外している。

…：かれらは、人間性の弱さを、現実において克服することのかわりに、陰にこもった罪の概念と、忍従とをもちこんだ。「悪人に抵抗するな。若し右の頬を打つものがあつたら、またもう一方の頬もさし出せ。」もしここに、寛容を読みとろうとするならば、原始キリスト教について何も理解していないのと同じだ。これは寛容ではなく、底意地の悪い忍従の表情である。

ここで「右の頬を打つ者には、もう一つの頬を向けてやれ」という言葉に込めるイエスの真意を明確にしてみよう。

イエスの時代、ユダヤ教の社会では、左手は不浄な行為を行う時にだけ用いられた。またユダヤ教律法も右利きの人間を基準にして作られている。死海文書の「宗規要覧」の中に、例えばクムラン共同体では、左手で何かイエスチャーをするだけで、共同体からの隔離と一〇日間の苦行が課せられた。

要するに、人を殴る場合にも左手を使うことはなく、右手を使った。強者が弱者の右の頬を殴ってくる場合、強者の右手は手の甲を使わねばならない。例えば主人が奴隷を殴る場合、夫が妻を殴る場合、親が子供を殴る場合、男が女を殴る場合、ローマ帝国の権力者、あるいはユダヤ教の権力者が貧しい庶民を殴る場合、殴る者は皆、右手の甲で相手を侮辱した。

そこでイエスは笑いながら、茶目つ気たつぷりに弱者に向かって言う、「右の頬を殴られたら、左の頬を向けてやれ」と。そうすると、侮辱を加える者は、右手の甲ではなく、右手の手の平か、こぶしで相手の左の頬を打たざるを得ない。すなわち、侮辱する者は手の甲で弱者の左の頬を打つことは不可能である。手の甲で相手を殴ることは侮辱を意味するが、手の平ないしこぶしで殴ることは、平等の人間同士の行為として了解され

る。侮辱を加えようとする者に対し、左の頬を向けることによって、我々は同じ人間なのだ、その仕草は告げているのだ。

ここに弱者を思いやるイエス、悪人の悪しき行為を容認するままに終わらせず、悪と闘う姿勢を促すイエス、そして同時に強者に対し、人間としての当然正しい行為を為すよう、回心(メタノイア)の機会を与えようとする、イエスの優しさを垣間見ることが出来る。「右の頬を打たれたら、左の頬を向けてやれ」この言葉を語る時、弱者を打ちのめす現実社会に対するイエスの反抗的姿勢の背後に、イエスのユーモアに富む笑いが、弱者の笑いと共にここでもまた仄かに聞こえて来るのである。イエスのこの言葉は、決して弟子たちに向かって語られたものではなく、現実には不当な暴力に曝さらされることを余儀なくされた弱者に対して放たれた、小気味よい言葉である。

人口に膾炙するイエスのこの言葉を、構造的暴力への非暴力による反抗的姿勢として解釈する時、現代の、例えばジーン・シャープの「戦略的非暴力闘争理論」の実践を促す、力強いエネルギーとなるであろう。

(米田彰男『イエスは四度笑った』、筑摩書房、二〇二四年)